
A little Typoone - 人形師 源十郎 -

”太った猫”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A l i t t l e T y p r y o o n e - 人形師 源十郎 -

【Zコード】

Z2391C

【作者名】

”太つた猫”

【あらすじ】

今回のヒロインはワーウルフ如月神無

彼と彼女と彼女の風景1（前書き）

CAUTION!

本作品と作者の趣味、及び性癖とは何の関連もありません

彼と彼女と彼女の風景1

「御主人様つ、待つて下さい」

朝のけだるげな雰囲気を吹き飛ばすほどの爽快な声が通学路に響き渡る。声の主は、小学生と見間違えそうなほどの小柄な身体と、見ようによつては耳のよつにもみえる真つ赤なばかりかいリボンを頭の上で飛び跳ねさせながらある男を田指して爆走してきた。

「……」声をかけられた男、校則で定められた真つ黒な学生服をキツチリと着こみ、これは校則違反の長髪を後ろで無造作に束ねた丸眼鏡の長身瘦躯のその男は、後ろからかけられた女生徒の声を黙殺した。

「御主人様つ！ 能登源十郎様つ！」

長い黒髪を風になびかせながら少女が、そう叫ぶ、その声に含まれる一つの単語に彼らの側を歩く者達が振り返る。が二人とも特に気にした様子もない。

「……」呼ばれた男、能登源十郎は再びその声を黙殺し、不自然にならないほどに歩調を早める。が、しょせん彼女の走る速度にはかなうはずもい。長い黒髪の上で耳のよつにも見えるいやに自己主張の強いリボンを頭の上にのせた少女が彼の元にたどりつくと、飛びつくようにして彼の耳元でささやく「ネークラでスケベで × で

な源十郎様ツ！ 今ならまーだ許してあげますよお、これ以上私に恥をかかせると大声であることないと言ひふらしますよお

一つ、と」

一つため息をつくと彼、能登源十郎はしぶしぶと立ち止まり自分の腕を差し出し、同時に少々タレ目ぎみの黒髪の少女の耳元で「何度も言うが、神無かんな、御主人様はやめろ」と疲れたような聲音でいうが、言われた彼女の方はお返しとばかりにそれを黙殺し、「今日のお弁当、楽しみにしておいて下さいね御主人様ツ」とことさらに最後の一言を強調して言い放つ。そして差し出された彼の腕に自分の

腕を嬉しそうに絡めると男を引っ張るようにして歩き出す。そして彼女の言うところの御主人様、能登源十郎に侮蔑、軽蔑、嫉妬などの様々な負方向の視線を投げかける通行人にしあわせそうな微笑みを振りまくことも忘れない。

これが能登源十郎と神無と呼ばれる少女の朝の風景だった。

彼と彼女と彼女の風景2

その光景を熱っぽい瞳でじっと見つめる人影があった。

『噂は本当だつた。』と彼女は思った。

能登 源十郎には黒い噂がある。

激烈なサディストである。というのがそれである。神無と呼ばれる少女を手込めにし、三流官能小説よろしく彼女を監禁調教し主従の関係を結んだというのがそれである。その噂を聞きつけて彼女はここにやつて来たのだった。他にも様々彼女を魅了するに足る悪い噂があつた。そして彼らを見張ることほぼ一週間、彼の黒い噂の一つ一つを確かめ、そして今日でその確信は固まつた。

衆人環視の中で自分の事を御主人様と呼ばせる剛胆さも素敵だし、その後に彼女の耳元で他の誰にも聞こえないように自分の奴隸に何事かを囁くという姿勢も素敵だし、彼は自分の理想に合致する。

「彼しかいない」そばの電柱に自分の手形をくつきりとつけながら人影は思つた。あの人こそ私の理想。神無といふあの娘、あの娘のあの人に対する眼差し、信頼よりなお深い愛情を通り越した盲従という名の種類の瞳。間違いないわ。彼こそ私の主人にふさわしい。彼なら私を導いてくれる。みんなには度胸がないのよ。幸福の価値観なんて人それぞれ違うもの。私は私の幸福を手に入れる。そうよ私は間違つてなんかいない。だってあの奴隸はあんなに幸せそういう。そうなる過程なんてどうだつていいいの、あの娘の姿こそが私の理想。私はあの人奴隸になるの。

その日、能登 源十郎は奇妙な物体を踏んだ。“きり、と鈍い音がしたにもかかわらずそれはどこか陶酔した声で

「ああーっ！ もつと踏みつけにしてえ！」とか叫んでいた。

いつものクセで源十郎は教室の扉の前でのたうちまわる奇矯なそれを冷静に観察した。長く伸ばすとあちこちに飛び跳ねそうな髪は短く切りそろえられている。全体的に小さめの目鼻立ち、やや小柄で胸のないことを除いても、いささか彼の趣味とは異なるが、まあ美人の部類に入れてよいだろう。“きり、”という最初の音は彼の靴の位置からして彼女の顎がはずれた音ではないかと思われるのだが、その人物は“きり”と平氣で叫んでいる。彼としては彼女の顔から自分の足を手早く避けたいのだが、彼女の細い腕のわりには以外にも頑強な力で自分の足首をつかまれているので、それもままならない。どうするか、とつい視線を上にあげる。と、横合いからの強い力で突き飛ばされた。

「きつさまあーっ！ 神無さんだけではあきたらずこのようないたいけな少女までその毒牙にかけおったかあ、この人間のクズめつ！ 貴様など生きている資格もないつ、今すぐにお前に引導を渡してくれるわっ！」

助かつた。と思ったのもつかの間、そうわめきたてられてげんなりとする。のだがそれがあまり自分の表情でないことを彼、能登源十郎は知っている。一神無（通訳）がいれば、とも思うのだが、そもそも彼女が誤解の原因なのだから、彼女の説得は意味をなさないばかりかこの場合火に油を注ぐ結果となりかねない。彼は目の前の男、格闘系のスポーツをやる者達に特有の雰囲気を熱烈に発散するその男をよく知っていた。柔道部長、加納 虎次郎である。というよりは“神無ちゃんをあの悪魔の毒牙から救おう同好会”的会長と言った方がこの場合 源十郎とこの男との関係がわかりやす

すいだるつ。

「きえいやつ！」氣合い一閃、目を爛々と輝かせ自分の正義に燃えさかる彼は自分より長身の源十郎の肩口をつかむと得意の背負い投げを放とうとして、くずおれた。その原因、彼の頭部を重そうなスポートバッグで殴り倒した女を見て、加納虎次郎は困惑の表情のままくずおれていった。

「危ないところでしたね、御主人様つ」微笑んで、先ほどまで彼の足下でのたうちまわっていた女はそう言つた。

「ふむ、ありがとう。というべきなんだろうな。この場合「意識を失つてなお自分の足首をつかむ男を見下ろし、その執念深さに感心しながらおざなりにそう言つ。

「いいえ、当然の事をしたまでです御主人様。お礼なんて私に首輪かいいぬのじるしをつけてくださるだけでいいんです」言つてにこやかな顔で真つ赤な犬の首輪を自分に向かつて差し出す。どうやら[冗談]でもないらしい。

「ふむ、人違い。ではないのか」にこやかに微笑んだままの彼女に向かつて疲れたように視線をむけるが、

「能登 源十郎のと げんじゅうろうつ、二年B組」言つて彼女は胸のポケットから一枚の写真を差し出す。そしてそこには間違なく自分と神無かんなが写つていた。

「ふむ、間違いでは ないようだな。だがな、覚えがないんだがな」写真の自分が写っている場所にピンクのペンで”これが私の未来の御主人様つ”と書かれているの見てげんなりとして言つ。

「ああっ！ ごめんなさいっ！！ 一人で舞い上がりっちゃつて、でも近い将来そういう関係になる予定ですから別にいいですね。それからこれはプレゼントですっ」一方的にまくしたて サキほど柔道部部長を撃沈したズシリと重いスポーツバッグを彼に押しつけると深々と一礼し時計を見「えっとお、今日はもう時間がないんでこれで…あ、わたし北洋高校一年A組ほくよう きよせいしき 如月きさつき 葉月はづきといいますっ、でもお好きに名付けてください結構です。じゃあねっ、御主人様つ」と言い残すと、まさに一陣の風と化して彼女は遠ざかっていく。

た。

畠天そして兩足は速く

能登 源十郎は実は学校で村八分にあつてゐる。

能登 源十郎には彼と神無との関係がいわゆる御主人様と奴隸のそれであるという黒い噂があるからだ。その確たる証拠はどこにもないのだが、大多数が一人の - 主に神無側の振る舞いから - そういう関係が事実であると信じ込んでいるためだ。そして今日の出来事は源十郎のその噂を真実として塗り固めるに十分に足る出来事だった。

源十郎は背後の教室から浴びせられる多数の視線を感じて、一つ大きなため息をついた。

「まあスッタあーっ 一緒に帰りましょっ」

最悪 と呼べるタイミングで神無の喜びに満ちあふれた声が廊下中に響き渡つたのは、その直後のことだった。

*

能登 源十郎はため息をついていた。

部屋中に並べられたSM雑誌なんかでしかお目にかかるないような道具類の一山（実物）を眺めての事である。

家に帰り着くなり、神無が如月 葉月と名乗る少女からもらつたスポーツバッグを奪い取り開け始めた。
その結果としての産物である。

「九尾鞭？ 簡易組立型二角木馬セットお？ 『これでどこでもいつものプレイが楽しめます。』う？ 動物用浣腸器？ 導尿カテーテル？ … もぐさにまち針にアルコールに脱脂綿、乗馬用鞭にスペ

ンクロッド、麻縄……」

いちいち数え上げるのも疲れたと言わんばかりの口調である。

「源十郎様、説明していただきます」

一度出した物を厳重にしまい込み、その上に座り込むと、彼女は彼を睨みあげるようにしてそう言った。

「もらつた

いつものように彼の説明は簡潔だつた。

「納得がいきませんつ、どこでどうやつたら、こんなものをもらつ
ような状況に出会えるつていうんですかつ！ ああつ、源十郎様が
こんな変態に育つてしまつなんて私の教育方針が間違つていたのか
しら。…私、もう休ませていただきます。私はもう疲れました。い
いんです。私なんてどうせ源十郎様のお荷物で役立たずでなんの価
値もない女なんです。落ちついたら本家の方に戻ります。…それか
ら源十郎様、いじめる方なら結構です。でもいじめられる方という
のはいままでお坊っちゃんを育ててきた者として我慢できません。
では源十郎様、お休みなさい」

憑かれたよつた足どりで出でいく彼女の背中を見送り再び彼はた
め息をついた。

*

天気は快晴だつた。ただ彼の隣を歩く神無の周囲には黒い雲がわ
だかまつている。

「いいんです。どーセどーせわたしなんか…」と、どぎもれなく咳
く彼女に源十郎はいささか感心もする。

「あ、いたいた。御主人様つ、どうですか プレゼント氣に入つて
もらえました？ えつとお、今年のイブは満月なんですよ。知つて
ました。それで…その一満月の夜（イブの日）に窓一つない地下
室で、それで虜めていただけたらつて思つて。えつとおもちろん先
輩も一緒でいいですよ」如月 葉月と名乗つた。短い髪の小柄な少
女はそう言つてくつたくのない笑顔を一人に向けた。

「神無先輩、どうしたんですか
顔色悪いですよ。御主人様に叱られたんですか、それとも昨夜の調教がハード過ぎたとかつ？」
言つて熱っぽいまなざしを丸眼鏡の奥の瞳に向ける。

台風襲来 その2

「プレゼントお？」

「あつ、なるほどお 昨日私がプレゼントした道具をさうそく使わ
れたんですね。神無先輩、どうでしたあ 燃えたでしょう」

「あれはアンタが？」

「そうですよお、聞いてなかつたんですか 今日から先輩と一緒に
御主人様の奴隸同士、仲良くしてくださいねつて、やつぱ奴隸同士
なれ合うのはいけないと思ひますう？」

「源十郎様？」

「ふむ、なにも言つてはいないんだがな」

「私、源十郎様の噂を聞いてずつと憧れてたんですよお。それでい
ろいろ調べて。昨日お二人の姿を拝見してその関係を確信しました。
私もそうなりたいなつて思つて…。ね、いいでしょ 源十郎様」

「噂？」

「そうですよお、源十郎様が激烈なサディストだとあ、あんまり
胸のない娘の方が好みだとかあ、ちょおーっと幼女愛好趣味っぽい
とかあ、数々の素敵なウ・ワ・サ。それでえ私を導いてくれるのは
もうこの人しかいないつて思つて。ね、いいでしょ 神無先輩」

「ダメっ」ようやつと事情が飲み込めてきた神無がにべもなく断る。
「えー、いいでしょお。だいたい源十郎様だつてその為に神無先輩
を作つたんでしょ。

ちゃんと先輩は尊重するからさあ。やつぱさあ人形よりも生身の女
の方が多いと思つのよ。ね、いいでしょお

台風襲来 その3

「なぜ、神無が人形だと知っている」言って源十郎が葉月に詰め寄る。丸眼鏡の奥で瞳が剣呑な光を放つ。

「えー、だつてあたし人狼だもん、鼻が利くの。だから生き人形なんて作つて可愛がつている人間なら、容赦もなく私も可愛がつてくれるなつて、そう思つて」

「人狼、ですつて」その一言で神無のまわりに未だ漂つていた暗雲は一転して雷雲に変わつた。ゆっくりと、如月 葉月を見上げる。

「そ、そおいうこと。ふつふつふつ初代、人形師”源十郎”の最高傑作のこの私があなたのような小娘に負けるもんですか。だいたいねえ、源十郎様は幼少の頃に出会つて以来わたしが丹精込めて育てあげてきたんですからね。それを今更あなたみたいなわけのわからん小娘にとられてなるものですか。人狼だというのならなおさら人間相手の時のような手加減も無用っ！剣 三十郎、来なさいっ！」

「神無」
「源十郎様は黙つて下さい、これは女の戦いなんですっ」

「そう、じゃあ勝てば源十郎様は私だけのものにしていいんですね」「やれるもんならっ！」言って神無は自動歩行して側にきた鎧武者の中に姿を消す。

神無は人形である。神を越えることを欲した初代 人形師 源十郎が永遠の処女性をコンセプトとしてつくりあげ、神無と名付けた生きた人形。それが彼女の正体である。彼女自身には多少力が強い他はなんの能力も持たない。

が、他の人形の中に溶け込むことにより様々な能力を發揮する。それが彼女である。

「剣三十郎、参る」

鎧武者がボソリと言つて腰の剣に手をかける。

剣三十郎、現在の源十郎、すなわち能登源十郎が幼少の頃に作り上げた鎧武者であり、両親を亡くした分家の小碎にすぎない彼を“源十郎”の名を継ぐ最有力候補におしあげることとなつた人形である。用途はその外見通りの戦闘用で、その身に様々なカラクリを持つ。

「そなからくりオモチャが役に立つもんですか。源十郎様は私が
もらい受けたあげます」

言つた如月葉月の内側の筋肉が盛り上がる、肌の露出部分には獸毛が生え、頭部が狼のそれとなり唇からは犬歯がのぞく。

「ふむ、人狼というのは本当だったか」呑氣に呴いて、賞品となつた源十郎は無責任にもこのまま登校するべきかどうかを迷つていた。が、迷う必要も別になさそうだった。目の前に柔道部部長、加納虎次郎がいた。

いや、この場合”神無ちゃんをあの悪魔の毒牙から救おう同好会”会長と言つた方がより適切だろう。と柔道部以外の猛者達が集いだした周りを見渡して源十郎はそう思った。

「ふむ、用件はわかっているんだがな」彼らにそれを実行させてやる気はあまりなかつた。

「そつかならば話は早い、われわれ”神無ちゃんをお前のような悪魔の毒牙から救おう同好会”会員の全員は神無ちゃんの幸せの為に自分達の生命をも惜しまぬ覚悟である」そこで一息つくと集まつた彼の同志の瞳の中に自分と同じ光を見いだし、満足げに一息ついて続ける。「よつてその元凶たる能登源十郎の抹殺を我々は決意

した」その瞳に悲壯なまでの決意を込め、普段は柔和で人好きのする顔を鬼のように歪めて彼は言い放つ。「これは昨日の事件によって能登 源十郎の悪行が確定したこともあります、第一、いや第二以降の被害者が出ないようにするための緊急措置である」と言いつつじりじりと包囲の輪をせばめてくる。

「ふむ、一対多数つていうのは卑怯とはいわないのか」とりあえず源十郎は言つてみた。

「おまえのような低俗な男にそのような配慮は無用つ！　害虫相手に礼節など必要ないわつ！」あつさりと切り捨てられた。

「ふむ、こうこうのは神無は嫌いなんだがな」

さらにもう一つ言つてみる。

「……貴様から解放したあとでよく説明して納得してもらひ。正義は我らにあるのだ。誠心誠意、もつて当たれば恐いものなどなし」苦渋に満ちた顔でそつまつ彼らにもはや何を言つても無駄だと諦めた。

「かかれいつ！」

かけ声とともに野郎どもがわらわらと源十郎めがけてやってくる。

能登 源十郎は人形師である。そして彼が”源十郎”の名を継ぐ人形師であるということは、この場合 彼が人体の構造を知り尽くしているということを意味する。とくに経絡とか秘孔とか呼ばれるものに精通している。三人まではその場所を手持ちの針で刺すことで眠らせるなどして行動不能に陥らせた。だが相手は多勢、動いているのに正確に針を刺すのは至難の業だ。先ほどの三人にしても自分に組み付いて動きが止まった所でなんとか打ち込んだのである。そうやつてさきほどから逃げ出す機会をうかがっているのだが包囲の輪はそのままで次の相手がその輪の中からのそりと現れる。自分を弱らせたところで確実に仕止めのつもりだと看破したが、だからといってどうなるものでもない。

「お館様になにをするつ！」

「御主人様になにする氣つ！」

二種類の声が同時にその場に空から舞い降りた。かと思うと源十郎の周りを囲む人垣をなぎ倒していく。いくら多勢とは言え突然現れた鎧武者と人狼にはなすすべもなく次々と倒れふしていく、そして最後の一人 加納 虎次郎が「無念…」とか時代がかつたことを呴きつつ倒れふした。

「ふむ、助かつたか」

「御意」

「当然の事をしたまでです。でもこれでけちがついてしまいました。神無先輩もう一度 今度は邪魔が入らないところで勝負です」言いながら人間形態に戻る。

「よからう、その挑戦しかと受けた」

「どうでもいいんですけど神無先輩、その喋り方なんとかならない

んですか

「まあ、それは仕方ない。神無かんなの特質上、自分の溶け込んだ形代かたじろの影響を受けやすくて な」

「ふーん、ま、いいや、じゃあねつ御主人様げんじゅうさまつ」

答える源十郎に片目つぶめをつむると、迅雷の速度で彼女は去つて行つた。

円に纏雲（むらくも）

神無は苦惱していた。

「つー、源十郎様にー他の女（悪い虫）を近づけさせないためにバラ撒いた噂のせいでこんな事になるなんてえ」

実を言ひと能登 源十郎の数々の悪い噂をバラまいたのは神無である。そしてそれを增長するよつた言動や行動を取つてきたのも当然 わざとである。

しかし、こんな展開は彼女の予想外だった。彼女の予定では他の女に相手にされなくなつた源十郎様が隣の美少女、もちろん自分の事である、に自然に惹かれてゆくはずだったのに。

「つー、失敗したよつー」抱え込んだ自分の頭の中でたで喰う虫も好き好きという言葉がぐるぐるぐるぐると回つていた。

加納 虎次郎は苦惱していた。

「また、救えなかつた」ボソリと呟いて彼、加納 虎次郎は打ち込みを再開した。

初めて彼女の姿を見たとき、可憐という言葉の具体例を見た気がした。しかすでにそのとき既に彼女は能登 源十郎の毒牙にかかりつていたのだ。

背中の、帯をまいた大木がぎしりと悲鳴のような音をたてるが気にもとめず、あの最低男をアスファルトの地面にたたきつけるつもりで思いつきりと打ち込む、みしりという音がするがやはり彼は気

にもしない。

能登 源十郎がどれほど愚劣な男か思い知ったのは、努力が実り神無ちゃんと初めてデートしたことだった。

映画館で、ファミレスで、遊園地で、なにかあることに彼女は電話していた。あの男のところにだ。事あるごとにあの男に報告を入れて許可を求めていたのである、さすがに腹が立つて彼女を問いつめてみれば「私のすべては源十郎様のものですから」と言い放つたのだ。それもある幸せそうな微笑みを浮かべて、だ。そして彼は決意した。彼女をあの男の魔の手から救い出そうと。

彼は知らない。彼とのデートそのものがちーっとも自分に惹かれない源十郎様への当てつけであったことも、たびたび彼女が電話して自分の居場所を源十郎に教えていたのも、源十郎様が嫉妬にかられてその場にかけつけてくれるのを期待しての行動であつたことを。

滝のような汗を流しながらも加納 虎次郎は打ち込みを続けていた。

嵐の到来

如月 葉月は吠えていた。

近所の犬どもが彼女の狼の声に唱和する。

月は満月にはほど遠いがそれでも彼女には十分だった。彼女は自分が変身する理屈を知らない。が変身できるという事実があればそれで十分だった。超常現象等を専門にしている雑誌などには月の光に含まれる成分のせいだと、月の引力のせいだとかいっている。だけどそのどれもが彼女にとつてどうでもいいこと、やり方を彼女の身体が知っているのだから、ただ 彼女は漠然と引力が関係しているのは確かかもしれない、と思う、確かに満月の日 自分の中の本性が出てきやすくなるのだ、何かに魅かれるよう。

如月 葉月は戦いの事を考えた。

実を言つと彼女は戦いがあまり好きではない。多くの人狼ハーツウルフが好戦的なのに対しても自分はそうじやない、その好戦的な血ゆえに暴走する者が多い中で彼女は変わり者だと言われた。しかし今度の戦いは自分から言い出したものだ。それに油断は禁物、神無は、強い。

*

翌朝、能登 源十郎は玄関で、どこかで身に覚えのある感触を足下に感じた。今回は心に多少の余裕があつたので自分の足下で彼女の傷が再生する様子を眺めることができた。

「うーん、この見上げる視界がなんともいえないっ」それは一言、そう言つと名残惜しそうにして立ち上がった。

「神無先輩、今日こそ決着をつけさせてもらいます」

「ふつふつふつ、今日は準備万端 早朝から源十郎様に身体のメンテもしてもらつたし、キッチリと返り討ちにしてあげるわっ！」

「そのまえに一言、ノーマル、なんだがな」

「そんなこと、もう関係ありませんっ！」二人に同時にそう言われて源十郎は天を仰いだ。そのまま一人に引きずられるようにして公園に連れられていく。

「「そこで源十郎様は黙つて見ていて下さい、ちゃんと私が勝ちますからね」と二人に同時に言われるに至つて、源十郎は抵抗をあきらめた。

「ふむ、女の戦いに男が口だしてろくな顔にはあつたためしひらしい しな」それがただの女ではないとなればなおさらだ。と思ひ、香気に”賞品”と書かれた看板を持ち彼は見物を決め込むことにした。

嵐の中で

様子見 などといつまでもうつこしい事はせず。一人は真正面からぶつかりあつていった。源十郎の見るところ早とパワーハードウルフにおいて多少、如月葉月の方が勝るか、事実 何度も神無^{かんな}、今は剣三十郎が危ういところがあつた。しかし決定的なところで彼女の方が力を抜く、どうやら彼女に決定的な一打を見舞う根性はないようだつた。しかしそれは剣三十郎の方とて同じ事、あまりに武士らしい武士を作つてしまつたので相手が女というだけでその鎧武者の剣先が鈍^{ものふ}る。

「ふむ、体力勝負になりそうだな」

「その前に貴様が死ぬ」

後ろからたくましい腕が伸びてきて源十郎の首を絞めかかる。その腕に自分の手をかけて抵抗するが圧倒的な力の差で締め上げられる。源十郎の身体から力がぬけ、柔道部部長 加納^{かのう}虎次郎^{じじゅうろう}が止めを差すために体勢を変えようと力を緩めた瞬間^{すきま}を逃さず。源十郎はその粗野な腕の中からの脱出に成功した。

「ふむ、結界を張つておいたはずなんだが……」首筋をなでさすりながら言う。あと、ほんのすこし首にかかつた力が緩められるのが遅かつたら間違いなく落ちていただろう。

「ふん、あの紙切れのことか、なんの呪いだか知らんがそんな姑息^{まじない}な手段がこの俺に通じるかつ！」

結界、と源十郎は言った。がそれほどまでに劇的な効果をあげるようなシロモノではない。なんとなくそこに確かにある存在を忘れさせるといった程度のものだ。その場所に強く来たいという明確な意志力さえあればどうとでもなる。それにその作業現場を見られていたというならなおさらその効力は薄くなる。

嵐鬪（らんとう）

「ふむ、前門の狼 後門の虎、どちらに喰われる方が楽かな」

「…」源十郎の独白には答えず。ジリジリと柔道着姿の男が前屈みの姿勢で詰め寄つてくる。

「ふむ、何度も言つたと思うんだが 誤解、『聞く耳もたんとばかり男が突進してくる。

「…なんだがな』間半髪くらゐの差で避けて源十郎が言つ。

「神無ちゃんともう一人の幸せの為に貴様を殺す」

「ふむ、そう思うからといってなにもこんな非常手段をとることもなかろうに』もう一人というのが彼、加納虎次郎をさすのか如月葉月の方を指すのかは判然としなかつたが源十郎は本心からそう

言った。

「きつとまあ一つ、言わせておけば」

「どうやら言葉どおりには受けとつてくれなかつたようだ。

「ふむ、…」ため息をつきつつ周りを見渡すが神無と葉月の二人は自分達の戦いに夢中で今回は援軍を期待できそうにもない。あいかわらず男は自分の射程距離までジリジリと注意深く間合いを詰めてくる。

源十郎はもう一つ大きなため息をつくと覚悟を決めた。

「きえいいつ！」と叫び声が上がるのと彼、虎次郎の天地がひつくりかえるのとは、ほぼ同時の出来事だった。何が起こったのかはわからなかつたが彼が、自分を見おろす源十郎とかいう下衆野郎に負けたことだけは厳然とした事実のようだつた。

「好きにしろ」言い捨てて彼はそっぽを向く、最高の間合いで会心の一撃を放つたのだ。それがはずされた今、抵抗は無意味だ。

「ふむ、では好きにさせてもらつぞ」言つて彼の身体の各所に幾本かの針を刺し、額に虎次郎にはわけのわからん記号の書かれた札が貼られる。

「だが、神無を救うとかいうのはどうする」

「ふん、潔くあきらめるとでもいうのか、残念だつたな。確かに今日は負けたが次は大差で勝つてやる。手足の一、一本でも折つてお

かんと貴様の命日はそれだけ縮むといつものだ」

「なるほど、な…」その声と微かな甘い香りとともに彼の意識は心地よい闇に呑まれていった。その寸前、彼が見たのは苦笑と言う名の表情だったろうか、ありえない。この無表情男が自分に対し_{かん}て表

情を表すという事態は…。

台風一過

「ふむ、たつたこれだけの動作でも身体に負担がかかるか」

言つて源十郎はその場にへたりこむ。

「マスターあーツ、勝ちましたツ」「どうやら葉月とかいう人狼は一度も神無に痛撃を与えられなかつたようだ。いくら人狼とはいえ文字どおり無限の体力を持つ神無が相手では分が悪かつたか。それでもやりようはいくらでもあつたはずだが…。

「負けましたあ、つて源十郎様どうしたんですか？」

「ふむ、ちょっとな」

「ちょっとな、つて、ああーつ私をマスターから救つだのなんだのつてしつこい男つ！　てことは源十郎様つ、ご自分に傀儡針をお使ひになられましたねつ。あれは危険ですからおやめ下さいって何度もいつたらわかるんですかつ！　文字どおり寿命が縮みますよつ！！」

人形師 能登 源十郎が人体の経絡秘孔等に詳しいのは既に述べられた事実である。傀儡針というのは針、札、香、呪言等を併用し生物の肉体、記憶を操る術の事である。源十郎は自分の身体のあるツボを針で刺すことにより多少人体のリミッターをはずしたのである。

が、そのような火事場の馬鹿力を出す事が身体に過負荷をかけることになるのは当然である。最悪　身体の各所に機能障害を起こしかねない。

源十郎の身体にはしる鈍い痛みは急激な酷使に彼の身体の各所が抗議の声を上げているのだつた。

「今日という今日は許しませんつ、『自分の身体をなんだと思つてるんですか、つて 私に負けた葉月ちゃんつ、私に負けたクセに何エッチいっぽおい事してるのかなあつ！…』

「治癒の力です」

「治癒の力つて、源十郎様の服ひつべがして、身体中を舐め回すこ

とがああ？」

「そうです、外傷ならその場所だけでいいんですけど、内蔵の方は
じつしないと、う、ううん！」

人形師 能登 源十郎は逃げ出す力もなく ただ困っていた。

*

かのう ひじゅう
加納 虎次郎は困惑していた。たしかに自分はあの憎つき男、
のと げんじゅう
能登 源十郎を尾行していたはずだ。それなのに今、自分は学校の
柔道部において打ち込みの練習をしている。誰も自分がここにこうし
ていることに疑問を持つてないようだ。 ▷ t - P B ▷

「練習中に白昼夢を見るのは、たるんでおるな」 そう小さく独白す
ると「打ち込み終わりつゝ、乱取りを始めるつー」 気合いで心気一転
してそう叫んだ。

その日 彼の練習はいつになく激しいものとなつた。 ▷ t - P B ▷

嵐の爪跡（あと）で

翌日^{あした}の朝、神無^{かんな}は不機嫌^{ふきげん}だつた。

それは隣で自分の身体^{からだ}の各所を軽く動かし、ふむ、久々に身体^{からだ}が軽いなとか言う能登^{のと}源十郎^{げんじゅうろう}のセリフに起因する。敗北感^{ひへいかん}が自分を打ちのめす。彼女は源十郎^{げんじゅうろう}の役に立たなかつたのだ。役に立つたのは如月葉月^{きさらぎはつき}だと言う人狼^{ハーハウル}の方で彼女は彼の身体を癒すのになんの役にも立たなかつたのだ。

「やつぱり私、源十郎様のお荷物^{けもの}なのかなあ、こんな役立たずの生人形^{じゆうぎ}なんていらないよねえ、はあ」

「そんなことありませんてば、お姉様^{おねえさま}」

「お、おお、お姉様^{おねえさま}あつ？」

「私達あつての源十郎様^{げんじゅうろう}でしょ、ねつ！」

「ふむ、ノーマルなんだがな」

「大丈夫ですつて、男の方なんて根本は暴力的なんですから。と、いうわけでよろしくお願ひしますねつ御主人様^{ごしゆじゆさま}」

「そそそ、そんなことよりそのお姉様^{おねえさま}つてのはなによつ、それにアント負けたハズでしょつ、私につ！！！」

「ええ、でも気づいたんです。私別にお姉様^{おねえさま}に負けたわけじゃないつてことに、私が負けたのは剣^{つるぎ}三十郎^{さんじゅうろう}であつてお姉様^{おねえさま}といつじやないんです」

「あんただつて人狼^{ハーハウル}の能力フル活用してたじやないつ」

「そうなんです、だからあの試合^{しあい}は引き分けつて事で」

「納得いかないつ！　ふつふつふつ、こうなれば今度こそ正真正銘、息の根止めてやる一つ！」

「あつ、嬉しいなつ。さつそくイジめてくれるんですけどっ！　なんていうかあ、真剣で斬りつけられるなんてえ、初体験^{はじめて}でクセになりますつ」

「イ、イジめ・る・つ？」

「ええ、私 気がついたんです。なにもお姉様と喧嘩する必要は別にないんだって、えーとですね、将を射んと欲すればまずは馬からという事で、お姉様さえ陥落してしまえれば自動的に私は源十郎様のものっ。というわけで本日 只今より私はお姉様のものですっ」

「いー やあー げ、源十郎様あ、助けて下さいー」

潤んだ瞳に見つめられて泣きそつになりながら傍らの男にしがみつく。

「ふむ、ま どう断つたところだ、な」

「はいっ、昨日源十郎様の身体を舐めつくしながらやつぱり御主人様しかいないって確信したんです。ということでおろしくおねがいしますねっ」

「ふむ、まあ どちらにしろお前の播いた種だ。後始末には責任を持つて、な」

「え”、源十郎様、もしかして知つてましたあ？ あああ、あの噂のでどー」「

「さて、な」

「良かつたあ。これで私達の仲はマスター公認ですね。お姉様つ

「い、やああ——————つ！—」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2391c/>

A little Typoone -人形師 源十郎-

2010年10月8日15時32分発行